

平城京東市跡推定地の調査 III

第5次発掘調査概報

奈良
市
立
史
博
物
館

昭和60年

奈良市教育委員会

序 文

奈良市は、古代日本の都であった平城京を源流とする歴史と文化遺産に恵まれた都市であります。しかし、京城の大半は平城京廃絶以降農耕地となり往時の痕跡は水い間、地下に埋もれたままになっていました。ところが、近年の都市開発の進展に伴ない事前発掘調査をする機会も増加し、從来文献等で断片的に知られるだけにすぎなかった京内の具体的な様相が次第に明らかになっております。これらの調査の大半は、いわゆる記録保存に終っているのが実情です。こうしたなかで奈良市教育委員会では、平城京の経済の中心であった東市推定地の範囲確認のための学術調査を昭和56年から継続して実施しております。今回の第5次調査は、市東辺の範囲確認と市内の様相を明らかにすることを目的としました。

調査にあたっては、土地所有者の御理解、御協力を得、また奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良市文化財保護審議会等の関係各位から数々の御指導をいただきましたことに対し、あつく御礼申し上げます。

昭和60年3月

奈良市教育委員会

教育長 藤井宗治

例 言

1. 本書は、昭和59年度に、国庫補助事業として実施した平城京東市推定地の第5次発掘調査概要報告である。
1. 調査地は、奈良市東九条町445番地の水田で、昭和59年11月9日から同年12月26日にかけて発掘調査を実施した。
1. 発掘調査は、奈良市教育委員会社会教育部文化財課（課長 亀井伸雄）が実施し、森下恵介が担当した。
1. 発掘調査および遺物整理には、補助員として飯野公子（奈良大学卒業生）・日高しのぶ（奈良女子大学卒業生）・吉田洋恵（帝塚山大学卒業生）・服部芳人・小網豊・谷岡孝久・藤田忠彦（以上奈良大学学生）の参加があった。
1. 発掘調査にあたっては、土地所有者である村井初夫氏の御理解と御協力を得るとともに、本書の作成にあたっては、奈良国立文化財研究所・京都知恩院から写真の提供を受けた。記して感謝したい。
1. 本書の執筆、編集は、森下恵介が行った。

I はじめに

第五次調查目誌抄

- 11月9日 発掘区設定、器材搬入
水田耕耘、床土の排除を開始。

11月16日 発掘区東半遺構検出開始。

11月17日 発掘区西半、水田耕耘、床土の排除を開始。

11月22日 発掘区西半、建物性穴を確認。

12月1日 遺構検出終了、写真撮影を行なう。

12月3日 國土方眼座標設定

12月4日 実測用道り方を設定開始する。

12月6日 実測図作成開始

12月12日 現地説明会

12月13日 補足調査を行なう

12月14日 砂入れ遺構養生後、埋戻し作業に入る。

12月26日 埋戻し作業終了、器材撤収



平城京東西山



表土排除作業風景



遺傳檢出作物風景

II 検出遺構の概要

発掘区の層序は、水田耕土の下、灰色粘質砂、暗茶灰色砂、灰色粗砂、黄色粘土となっており、遺構は、灰色粗砂層および黄色粘土層上面において検出した。検出した主な奈良時代の遺構は、道路1条・溝3条・掘立柱建物9棟・土壙2箇所である。

S F010 発掘区東端で検出した坪境小路。左京八条三坊の十一坪と十四坪を画する。路面幅は4.5m前後を測り、東西両側溝をもつ。

S D008 道路S F010の東側溝と考えられる南北方向の素掘り溝。今回の調査では、溝の東肩が、発掘区外となり、全幅を明らかにしえなかったが、第3次調査での検出部分では1.6m~1.8mを測る。深さは20cm程度で、奈良時代の土器片を含む暗茶灰色粘土が堆積する。

S D009 道路S F010の西側溝と考えられる南北方向の素掘り溝（幅1.5~1.8m、深さ約20cm）

溝内には、奈良時代の瓦片、土器片を含む、暗茶灰色粘土が堆積する。

S D018 溝S D009の西側で、これに平行する南北方向の溝（幅1.5~2.0m、深さ約15cm）。第2次調査では、十一坪北辺に築地の存在が確認されており、今回の発掘区では、小路西側溝S D009と、この溝の間に十一坪の東辺を画す築地の存在を推定することが可能であるが、築地本体は削平されたためか検出できなかった。

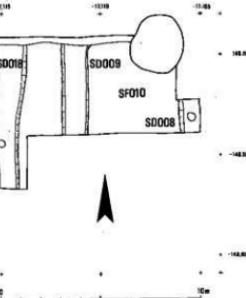
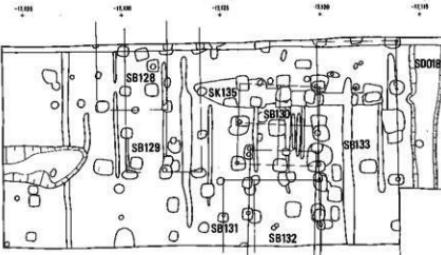
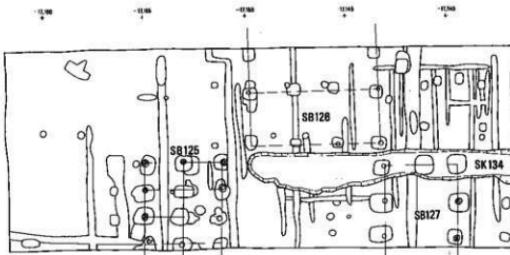


S B125 発掘区西寄りで検出した東西2間(4.2m)、南北3間(4.05m)の掘立柱建物。柱間は、東西方向が2.1m、南北方向が1.35mの等間である。



5柱穴に柱根（径15~20cm）が残存する。

S B126 身舎の桁行が3間(6.3m)、梁行が1間(1.8m)以上の東西棟。南面に窓(2.7m)をもつ。柱間は、桁行が2.1mの等間、梁行は1.8mである。



I 耕土
II 灰色粘質砂
III 黄色粘土層（上部部分分離）
IV 灰色粗砂
V 黄色粘土



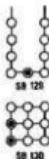
検出遺構図(1/200)・堆積土層図(1/50)



SB 127 衍行2間(3.6m)以上、梁行2間(3.6m)の南北棟。柱間は、衍行、梁行とも1.8m等間である。2柱穴に柱根(径15cm)が残存する。SB 125と北妻の柱筋を揃える。



SB 128 衍行2間(3m)以上、梁行2間(3.6m)の南北棟。柱間は、梁行が1.8m等間であるが、衍行は不揃いで、柱穴はいずれも不整形で小さい。



SB 129 衍行3間(6.3m)以上、梁行2間(3.6m)の南北棟。柱間は、衍行が2.1m等間、梁行が1.8m等間である。



SB 130 東西2間(4.2m)、南北2間(4.2m)の總柱建物。柱間は、東西、南北柱間とも2.1m等間である。

SB 131 身舎の衍行が1間(1.8m)以上、梁行が2間(3.6m)の南北棟。西面に扇(1.8m)をもつ。柱間は、衍行、梁行とも1.8m等間である。

SB 132 衍行3間(5.4m)以上、梁行2間(3.6m)の南北棟。柱間は、衍行、梁行とも1.8m等間。重複関係からSB 131よりも新しいことがわかる。

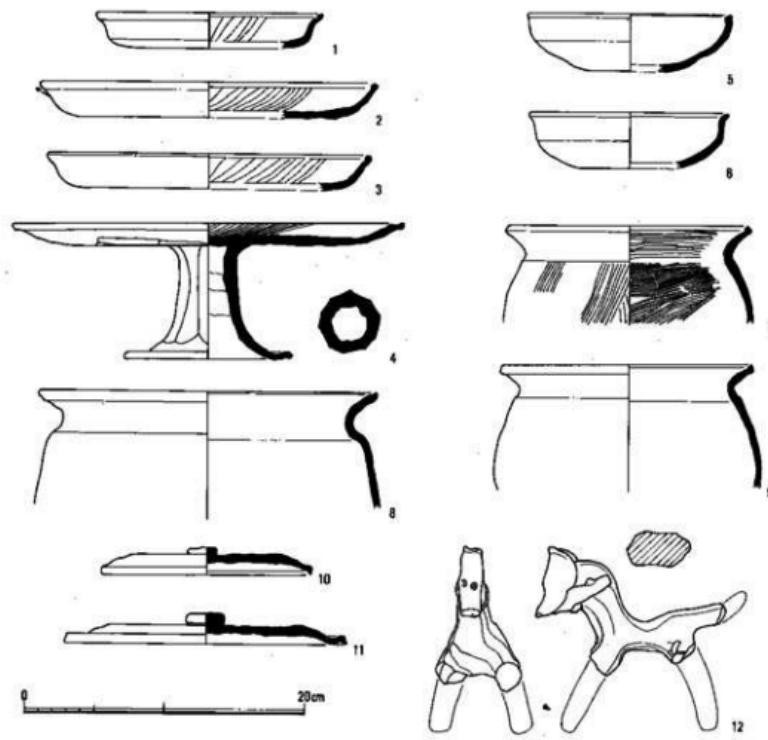
SB 133 衍行4間(8.4m)以上、梁行2間(3.6m)の南北棟。柱間は、衍行が2.1m等間、梁行が1.8m等間である。重複関係から、SB 130、132よりも新しいことがわかる。

SK 134 幅1.3~1.8m、長さ18m、深さ10~20cmの溝状の土壙。重複関係から建物SB 127よりも古いことがわかる。埋土は、灰色粘土で炭化物を多く含む。埋土中からは、奈良時代前半の土器類と土馬が出土した。

SK 135 幅1.6m、長さ3.6m、深さ約10cmの土壙。建物SB 129・130などよりも新しく、埋土中からは、若干の土器が出土した。

III 出土遺物の概要

遺物は、土壙、溝、柱穴などの遺構の他、灰色粘質砂、暗茶灰色砂屑などから出土した。量的には、きわめて少なく、細片が多い。瓦類はほとんどなく、軒丸瓦、軒平瓦の出土はない。土器類では、土壙SK 134から出土したものが、比較的まとまりをもっている。土師器には、杯A・杯B・皿A(1~3)・高杯A(4)・碗C(5~6)・甕(7~9)・カマドなどがある。皿Aは、いずれも内面に放射状暗文1段をもち、外面は、口縁部のみよこなでを行うが底部には調整を行っていない。高杯Aは、粘土紐巻き上げによって脚部をつくるもので、脚柱部はヘラ削りで10角に面取りする。杯部下面はヘラ削り、上面にラセン状と斜放射状の暗文をもつ。須恵器に

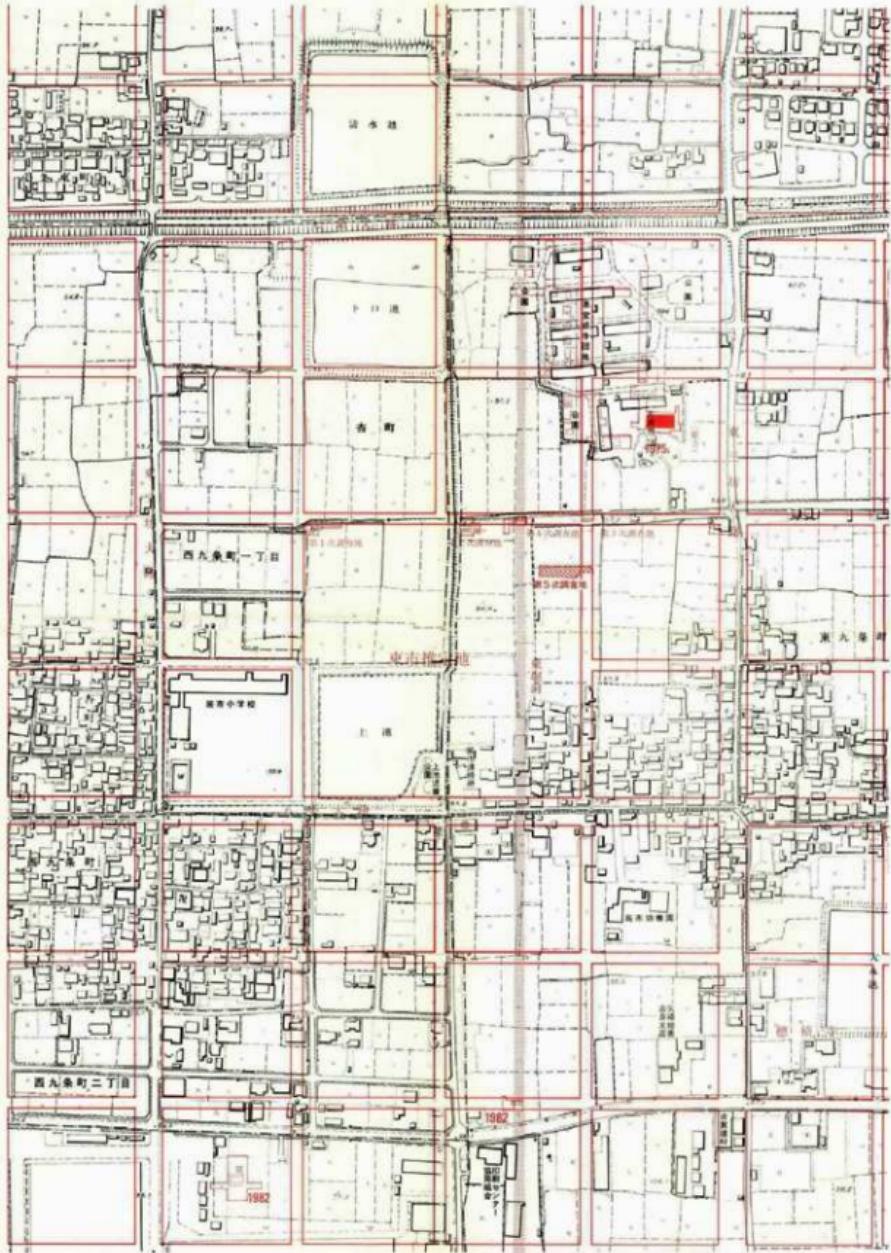


出土遺物 34

は、杯B蓋（10・11）の他、皿B・蓋A・鉢A・甕A・平瓶などがあるが、小片で図示し得ない。土馬（12）は、脚部を欠損するが、高さ13cm前後とみられるものである。

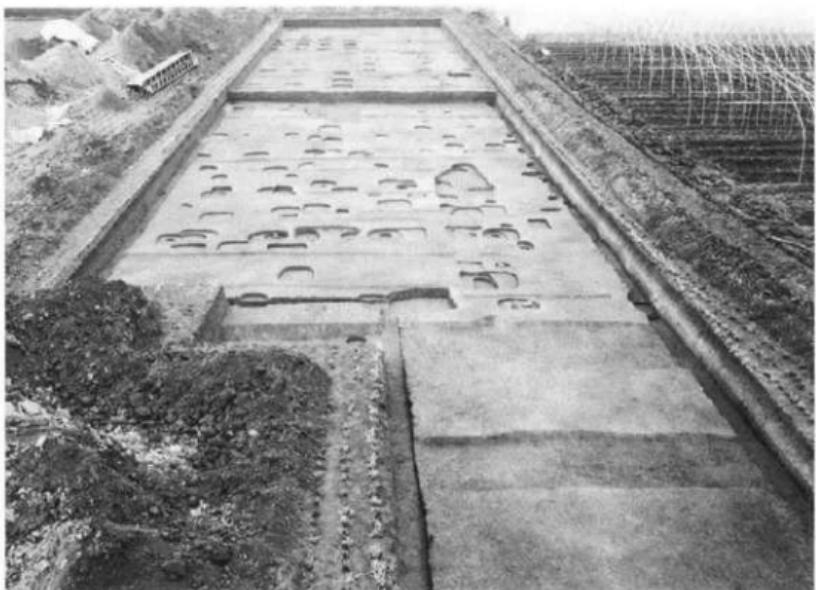
IV まとめ

今回の調査では、市と推定される十一坪内部の遺構を、その一端ではあるが、初めて確認することができた。検出した建物は、重複関係から、少くとも4時期以上の建替えがある。S B125とS B127など柱筋を揃え、計画的に建てられたであろう建物が存在すること、S B125やS B130など倉庫と考えられる総柱建物が存在すること、南北棟が多いことなどが、注目すべき点としてあげられる。しかしながら、これらの建物を文献にいう「市廩」「肆」と直接結びつけるには問題点も多く、今後とも市の範囲や内部構造の解明に向けて調査を継続していきたい。

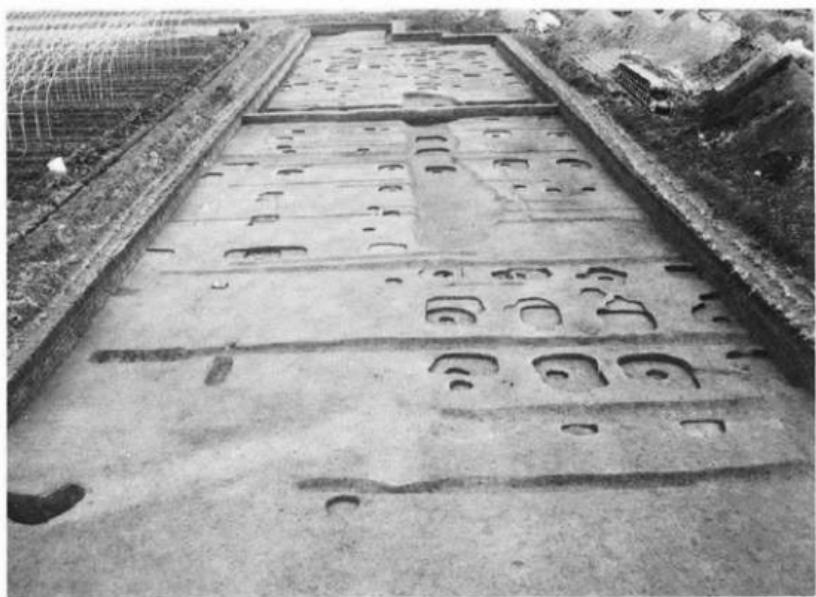




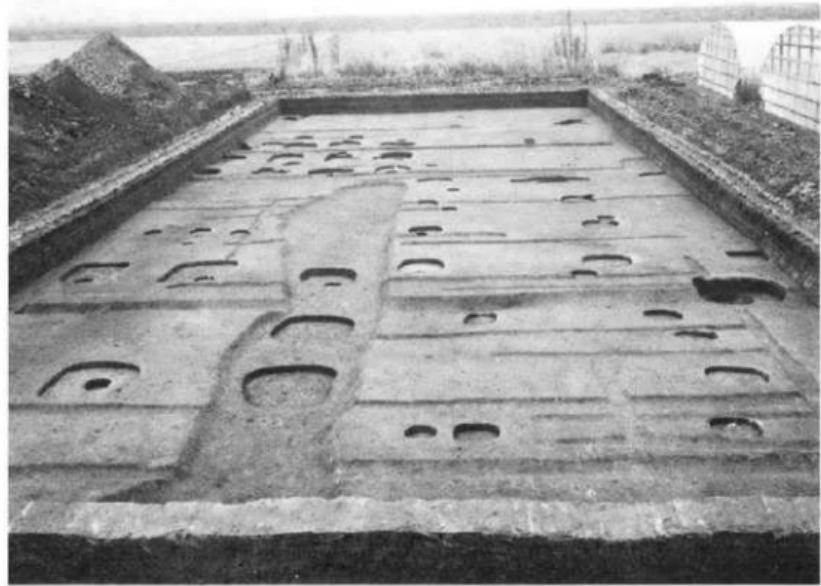
東市推定地図調査写真（1982年撮影）



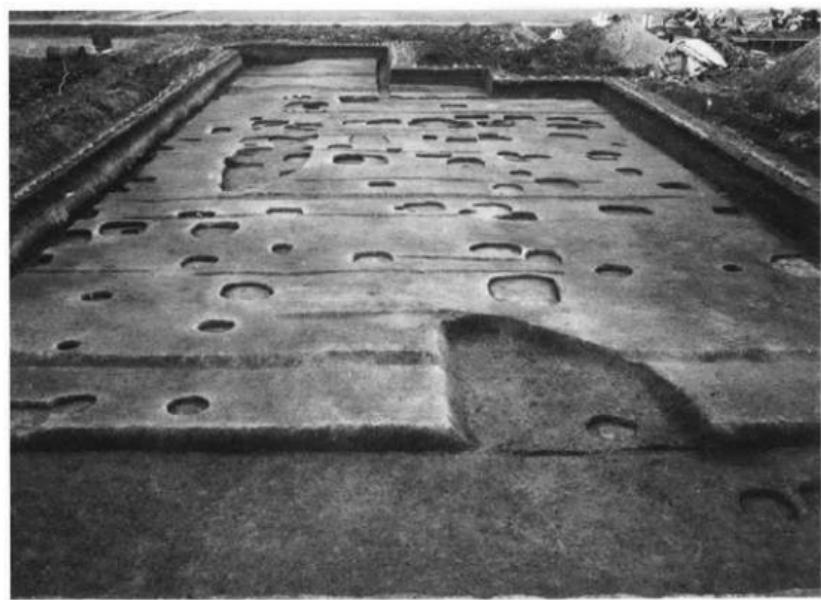
第5次調査発掘区全景(東から)



第5次調査発掘区全景(西から)



第5次調査発掘区西部分(東から)



第5次調査発掘区東部分(西から)

平城京東市跡推定地の調査Ⅲ
第5次発掘調査概報

昭和60年3月印刷・発行

編集・発行 奈良市教育委員会
(奈良市二条大路南1丁目1-1)

印 刷 共同精版印刷株式会社
(奈良市三条大路2丁目2-6)